次回例会のご案内

是非ご出席ください！　課題を共有しませんか？

日 時 ▶ ８月２日(月) 午後７時～9時

会 場 ▶ 愛宕町教会

奨 励・発題 ▶「英和学院の昨日・今日・明日」

大木 正人 牧師（山梨英和中学校教頭・宗教主任）

3ページより続き

程度です。このような低額で出来ますのは、地域の皆さまの善意の賜物です。イエスが、パンを増やした福音書の箇所を思い浮かべます。

⑵市内パトロール

毎月１回、「炊き出し」に参加できない方や、知らない方とのかかわり合いを持つため甲府市内の公園等を山梨ユニオンの皆さんが中心になり、実施しております。１月頃は、甲府駅周辺、公園等に路上生活者等がおられ、炊き出しに来ている顔見知りの人の案内で、新しい人とも気軽に話ができました。最近、４月、５月は、甲府市の生活福祉課の皆さんがお忙しいにもかかわらず時間をさいて親身になって相談にのり、生活保護受給の手続きをしてくれますので、パトロールをしても、会う人が非常に少なくなりました。

⑶行政とのかかわり合い

昨今の厳しい社会情勢を受けて、県及び市町村の担当部門は、昼間は、生活困窮者等相談や生活指導に追われ、事務処理などを夜遅くまで行うような現状にあって、職員の方々は、極めて大変な状態になっております。Ｋ県会議員の定例議会での質問により、県でホームレス対応の連絡会が開かれたり、甲府市のＳ議員の市側との話し合いで生活福祉課の担当者が増員されたり、中央市の毎回「炊き出し」に参加しているＮ市会議員の議会質問で具体的に市政が関与し始める等、行政側からも路上生活者等に一歩進んだ諸施策がはじまりつつあります。

⑷その他のかかわり

「炊き出し」を通じて路上生活者等と友達になった各個人が、それぞれのタレントを活かし具体的には生活保護申請のサポート、住宅の紹介、仕事の紹介、家族との絆の回復、病気の時の世話などです。

7. まとめ

結論から申し上げれば、新たに弱い立場に追い込まれることがないような社会づくりをし、このやまなしライフサポートを解散することです。これが活動の最終目的だと思っております。この活動に事務局「使い走り」として参加し、多くのことを見ることができました。①相互の心の交流：ひとつの幹につながる枝のように「痛みを全身で共感」している姿を見ると、神は「ここにおられる」と強く感じ、福音は教会の専売特許と考えていた私自身に痛烈なパンチになりました。②弱い立場に立たされた人々の鋭い感性：よく考えますと口では「あなたたちと一緒にやりたい」とかカッコよく言っていますが、心のどこかに「炊き出しを通して何かしてやるぞ」というところがあり、ちょっとした言動から、見透かされ、「まだまだ」だと思っています。③すべてから学ぶ：この活動に加わり、ホームレスの人々をはじめ、沢山の人々を知ることが出来ました。そのひとり一人から、「真の連携、サポート」とは何かを学びました。すべての人々の歯車のような強い突き出した面と窪んだ弱い面がかみ合い、全体として大きな力となって動いていく社会づくり、これに向けてお互いに努力することの大切さを学ぶことが出来ました。このような社会ができ、復活したキリストが再臨する世の終わりに、人間をはじめすべての人々が一人として欠けることなく共に大いなるものの創造の御業を永久に賛美するすばらしさを思うと、私のような小さいものにも希望がもてます。今後ともよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

2009年度の組織会

連絡会代表　小島章弘
連絡会委員　清藤城宏（書記）
横山文彦、古屋秀樹（会計）
北　紀吉（顧問）、鈴木信行

編集後記

☆第５回の例会は　名の出席で持たれました。
今回は、カトリック教会が中心となって行われている路上生活・生活困窮者への支援活動をレポートしていただきました。神の恵みを分ち合うそのフットワークの良さに脱帽でした。（清藤記）

Tomosibi 灯

山梨県キリスト教連絡会
2009年10月設立　代表：小島章弘

事務所▶〒400-0024 甲府市北口3-4-23　日本基督教団 愛宕町教会内　Tel 055-253-3150

NEWS LETTER NO.5

奨励「キリストからパン（神の恵）をいただく者として」

山田宏亨 神父（甲府・韮崎・塩山カトリック教会助任司祭）

群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買いに行かないかぎり。」というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい」と言われた。弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。

ルカによる福音書　第９章11～17節

今日選んだこの箇所は昨日（６月６日）のミサで読まれた福音です。この箇所から思うことをお話したいと思います。

我々のカトリック教会には「秘蹟」と呼ばれるものが７つあります。そのうちの一つは「洗礼」ですので、プロテスタント教会の方々にもどういうものかは想像がつくのではないかと思います。その秘蹟のなかの一つに「ご聖体」というものがあります。プロテスタント教会でも聖餐式のなかでパンをいただいていると思いますが、カトリックとの違いでいえば、我々はこれが単なる印ではなく、本当に、見た目にパンであってもその本質においてキリストの体であると信じています。これが過去においてプロテスタント教会との議論になったこともあります。これは双方の教義の違いですが、神様が望まれること、喜ばれることは何かということを突き詰めていくと教義とおなじくらい大事にしなければならないことがあることに気づくのではないでしょうか。

我々は毎週日曜日に教会に集いそれぞれの教会で神様への賛美と感謝の祈りが捧げられますが、同時に、新しい一週間のための「恵み（神様からの力）」もいただきます。この恵みをはたして自分だけのものにしてしまってよいのかということです。聖書のタラントンの話もそうですが、自分が神様からいただいた才能や毎週いただく恵みを自分のところで止めてしまうのではなく、さらに広がっていくことを神様は望まれていらっしゃるのではないでしょうか？

ですから「人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい」とある五十人の組は「教会」を指し、「裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた」とあるのは神の恵みをいただく我々と、それを「配る」ことを表しているのではないかと思います。

甲府カトリック教会は市民グループの方々と協力して路上生活者や生活困窮者の支援を行っていますが、これは上述の神の恵みを分配する、他の人々と分かち合うことではないかと思います。もちろんこれがすべてではないと思いますが、神様から同じ恵みをいただくわれわれが、それぞれの置かれた立場で少しずつ力を出し合えば、それがやがて神様をあかしする大きな力となっていくのではないでしょうか。

みなさんの上に神様からの恵みと平和そして、必要な照らしが豊かにあたえられますように。祈りのうちに。

第５回例会 発題報告

弱い立場に立たされた人々の中に神の愛をみる

―やまなしライフサポート等の活動を通じて―

木村　輝三氏（やまなしライフサポート事務局長、甲府カトリック教会員）

1. はじめに

「やまなしライフサポート」の活動等の現況と、この活動を通して私が感じたことをお話させて頂き、皆様のご指導とお祈りにより、路上生活者等弱い立場に立たされた方々の希望と、私自身のゆるしと償いの助けになることを願っております。

2. 仲間と共に

私はサラリーマン生活を終えるまで、多くの人々の思いやりにより、経済的には大変な時期が多かったのですが、精神的には身近に常に自然体で支えて下さる先輩や友達がおり、大変幸せなものだったと感謝しております。この体験から、仲間でお互いに支えあう場があればと想っているときに、著名な佐藤初女さんのことを知りました。

佐藤初女さんは、悩みや重荷を背負った人々が訪れ、話したり食事を共にすることで癒され、自分を見つめなおし、新しいエネルギーをもらって帰る場所になってほしいと、1992年に岩木山の麓に「森のイスキア」をつくりました。このコピー版を願って、畑の家「ほたる」を３年前に友人たちと共に昭和町に立ち上げ、畑で採れた野菜で食事をしたり、読書会をしています。この「ほたる」の精神的な支柱となって下さった甲府カトリック教会に2008年４月までおられたＯ神父様は、その当時、何も直接話してくださいませんでしたが、毎日、荒川の方を歩き、橋の下で生活されている人々に話しかけるなどされてホームレスの人を支援しておられ、転任されるときに初めて、ひとりの人を紹介され、その人と友達になることを勧められました。この神父様は、司祭にとってミサの司式は最も尊い奉仕とされていますが、病気や苦しんでいて緊急に支援が必要な人に対しては、ミサを中止しても、入院の面倒から小さな子どもさんの世話までされておりました。私は聖書の根底にあるものを教えられたような強い印象をうけました。

その年の秋に、大阪の西成地区で、貧しくされた労働者たちと共に生活しているフランシスコ会の本田哲郎神父をお招きして山梨大学でお話を聴く機会もあり、表面的な自称キリスト者の私には大きなショックでした。丁度この頃より、アメリカのサブプライムローンから始まった世界的金融危機の影響で多くの人々がリストラや派遣切りにあい、社会的に弱い立場に追い込まれている人々にとって、一層困窮な生活を余儀なくされる様子が、毎日、テレビや新聞で報道されるようになりました。

3. 困難な立場に追いやられた人々とかかわり

⑴市内パトロールの試み

このような人々と関わるために、数人の者が呼びかけ人となり、2008年12月24日のクリスマスのミサの中で年末年始の緊急支援「炊き出し」等への協力をお願いしました。12月28日、29日の両日に夜、市内の公園、駅、橋の下などをパトーロールし、実情の調査を兼ねて「炊き出し」へのお誘いをしました。10数名のホームレスの方々とお会いしお話しすることができました。しかし、実際は、私をはじめ参加した者が初めての経験であること、誰にどのように声をかけたらいいかわからず、冷汗ものでした。

一日目には、声をかけた相手の人が「ありがとう」とパンとビラを受け取ってくれたときは、「ほっ」としたというか「良かったなー」というのが実感でした。ホームレスでない人に声をかけて嫌な顔をされたり、また一般の人から「ご苦労さん」と言われたり、いろいろな経験になりました。二日目は、一日目の体験から弁当をもって行きました。このパトロールを通して、見ず知らずの人を信頼してパンや弁当を「ありがとう」と受け取る謙虚さが、渡す側の人にどれだけの喜びをもたらすかを実感しました。また、多くの人々が温かそうな服装で足早に家路に向かう華やかな年末の商店街を一歩入れば、2000年前のキリスト誕生の馬小屋を思い起こすような場所で青いシートや汚れた毛布で寒さをしのいでいる人々がいることに何ともやるせないものを感じました。

⑵炊き出しの実施

路上生活者の方々とかかわりを持つ手段の一つとして「炊き出し」を試みました。2008年12月30日、カレーライス、味噌汁、サラダを作り、強風の中、教会のガレージで第１回の炊き出しを行ないました。13人の方が来てくださり、寒い中でお代わりをする方もあり、食べていただき、食事を作った女性たちも喜んでおりました。初めてのこともあり、皆さんが唯、黙々と食べ帰って行くのが印象的でした。また、山梨大学の学生２名も応援に参加して下さり、教会の中にいる者から見れば一般の方の参加は、本当にうれしいものでした。冬の期間だけ、毎週木曜日に行うこととしておりましたが、「炊き出し」に来てくれる方も増え、また、経済情勢は依然好転しないことから、リストラで急に職を失い、アパートも追われ、何日も食べていない方なども来られるようになりました。これらのことから当分の間、炊き出しを継続することとしました。今日までに、昨年夏期のおにぎり配りも含めて延べ76回行ってきました。木曜日は、イエスが弟子たちの足を洗い、受難の前の最後の食事をした曜日でもあり、ご来場の皆さんと我々スタッフが共にひとつになることを願うにふさわしい日と思っています。回を重ねるにつれて、ご来場の方々の数も増え、平均的には50名位となっております。また、私たちは積極的にご来場者のお名前を聞いたり生活状態を聞くことをしませんが、食事を通してお互いのかかわり合いも深まり、名前や生活状態などを話してくださる方も多くなり、最近では会場の準備や後片付けなども手伝ってくださるようになりました。来場者同士も、お互いの情報を交換しながら、仕事のない人に「俺の仕事を分けてやる」とか、来られない人の「食事」を持って行ってやるとか、自然の形で相互の助け合いが出来てきました。同じ立場にあり、同じ気持ちの者同士が真に理解し合え、共に歩むことが出来るのだと痛感しました。同じ立場にない者が同じ立場に立とうとすること、また、立っていると思うこと事態が相手を理解することの大きな妨げになっているのかとも思います。また、余談になり恐縮に存じますが、ご来場の方から、ただ　食べるだけでは申し訳ないので日曜日の礼拝（ミサ）にも来ますよとか、礼拝に来なくてすみませんとか言われます。別に礼拝に参加してもらうために「炊き出し」をしているのではないからいいよと言っていますが笑い話のようなこともあります。中には、それでもミサに参加してよかったと言う方もおられますし、一度で止める方もおりました。

4. 市民運動「やまなしライフサポート」への発展

「炊き出し」がマスコミで取り上げられたり、口コミにより地域の皆さんに知られるようになり、昨年2009年１月頃から、山梨県ボランティア協会はじめ多くの市民や団体の方がお手伝いに来てくださるようになり、仕事の紹介、住宅の斡旋、梨大の医師による健康相談、生活保護の支援等をして下さるようになりました。また、多くの市民や団体の方からも毛布、寝具、お米などの食料品、金銭のご寄付も頂きました。また、遠くから歩いて来られたお年寄りのご婦人が、手伝いにも来られないし年金生活であまり寄付も出来ませんが困っている人のために、と数万円の多額のお金を置いていかれたこともありました。その他にも、他県の障害者施設がチャリティコンサートを開き、ご自身の施設で使うことなく多額の寄付を下さったところもありました。この協力団体や個人の連携により、ご来場の路上生活者等経済的に困窮に追いやられた方々への一層のかかわりとサービスにつながることを願って、2009年５月に第１回目の「炊き出し」協力者グループなどとの話し合いを持ちました。４団体20名の方がご参加頂き、今後連携して、この活動を継続することなどを話し合いました。これを受けて第２回目の会合が10月21日に13団体32名が出席して新たな市民グループを設立することを決め、これに引き続き11月11日に話し合いを行い、参加12団体よりなる「やまなしライフサポート」を立ち上げました。12月23日には、山梨ユニオンの主導により、全員で市内全域の公園等41箇所をパトロールし、16名の路上生活者と面接、その他16名の方が路上生活をしていることがわかりました。

12月27日には、やまなしライフサポートの発足食事会を行い、参加団体はじめ多くの市民等80名と路上生活者等54名が参加して、全員で同じ食卓を囲む予定でしたが、予想を上回るご参加をいただいた為に全員では出来ませんでした。またこの時に、医療、生活、住宅、雇用相談も行い、多くの利用者がありました。主な参加団体としましては、日本キリスト教団、山梨ＹＭＣＡ、フードバンク山梨、山梨ユニオン、ハート51、甲府食事サービスをすすめる会、八ケ岳名水会、日本キリスト教婦人矯風会、オアシス、カトリック教会（甲府・韮崎）、スペースふう、畑の家「ほたる」などで、個人でも利用者の代表、県会議員、甲府市会議員、中央市市会議員などが参加されており、それぞれの団体や個人のミッションを生かして、緊密なネットワークを構築して、来場者の立場を考えた活動を「炊き出し」をコアにして行っております。

5. 具体的な活動

⑴活動のコアの「炊き出し」

毎週木曜日午後４時30分頃よりカトリック甲府教会の講堂で行っております。ご来場される人々は、早い方で12時30分頃から集まりはじめ、来場者同士で雑談をしております。私たちも手が空いていれば仲間に入ります。スタッフは、２時に集合して食事作りをはじめ、４時半頃より配膳、５時30分頃には終わり片付けを行います。ご飯は「甲府食事サービスをすすめる会」が炊いて下さり、おかずは、その日にスタッフと飛び入りのボランティアで作ります。教会関係の中高生や、ＹＭＣＡのリーダー達も参加し、食事作りを通してお互いのコミュニケーションや親睦の場にもなっております。また、フードバンク山梨が、毎回、食材の提供や、ご来場者のお土産を用意して下さったり豆腐料理やスープなども作って下さっており、特にお土産は、路上生活者に便利な非常食用のご飯、缶詰などで、大変歓迎されています。食事の前後を通じて、スタッフが生活保護申請のサポート、住宅、医療、就労等の相談も、特別なコーナーを設けず、通常の会話の中で行っております。この会話の中で、多くのことを来場者の方々から学ぶことが出来ます。なお、環境面でも、昨年までは、食器は使い捨ての発泡スチロールの容器を使用しておりましたが、「スペースふう」のご好意でプラスチックの貨容器を利用したり、お土産用のポリ袋も、来場者に再度持ってきて頂くようにするなど配慮しています。その他にも、ダルク（薬物依存症からの回復の自助組織）からの自立者の方も仕事で疲れているのにもかかわらず良く手伝いに来てくれなど、多くの善意の皆さまの奉仕により炊き出しが継続していることは、大変、有り難いことだと感謝しております。この炊き出しについて、他のボランティア団体等から「よく資金が続きますね」と言われますが、今までの実績では、現金での支出は、一食94円

４ページへ続く